

出雲市で越冬するヒシクイが中国のハンカ湖に到着

平成 22 年 4 月 8 日(木)
(財)山階鳥類研究所

島根県出雲市で越冬するヒシクイ（亜種未確認）の繁殖地を究明するため、3月に衛星追跡用の発信器を装着した3個体が、日本海を縦断して中国黒竜江省ハンカ湖（中国名は興凱湖：こうがいこ）に到着したことがわかりました。うち1羽では直線距離で850キロある日本海を8時間余りノンストップで渡ったことも判明し、平均時速は約90キロと計算されました。

日本で越冬するガン類やハクチョウ類が日本海を縦断して渡るのが確認されたのは、1994年に米子市からロシアのウラジオストクまで渡ったコハクチョウに続き2例目で、ガン類では初めてのことです。

また、従来、北日本で越冬するヒシクイは、カムチャツカから渡来することが知られており、中国東北部への渡りは新知見となります。山陰地方で越冬するヒシクイは形態的にも遺伝的にも北日本で越冬するものと異なる点があり、引き続き形態学的、分子遺伝学的な分析を実施する計画です。

※この研究は、(財)山階鳥類研究所が、日本雁を保護する会、日本野鳥の会島根県支部、(財)ホシザキグリーン財団、(財)しまね自然と環境財団、国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所、リバーフロント整備センターなどの協力を得て行っているものです。

1. 衛星追跡の方法について

ヒシクイの背中にアルゴスシステムの発信器（重さ45g）を装着。ほぼ隔日アルゴス発信装置からの電波を人工衛星が受信して位置情報を計算し、インターネットを介して鳥の位置が特定できる。

2. 衛星追跡の結果（4月5日現在）：図-1、2）

○ 個体A：

3月30日の朝出雲を出発し、同日夕方にはロシア・ウラジオストク西に到着。その後4月1日朝までに中国黒竜江省ハンカ湖の北岸に到着。出雲からの直線距離は1,100キロである。

この個体は、日本海を8時間余りノンストップで渡ったことも判明。

○ 個体BとC：

3月29日の夜または30日の朝まで出雲に滞在していたことが判明。その後31日昼から午後までの間に中国黒竜江省ハンカ湖の北岸に到着。

○ ハンカ湖（興凱湖）の北側は中国領、南側はロシア領。

ラムサール条約の湿地に登録されている。

この件についての連絡先

(財)山階鳥類研究所 (270-1145 我孫子市高野山115)

保全研究室 室長 尾崎清明（又は広報担当 平岡考）

電話：04-7182-1107、Fax:04-7182-4342、メール：ozaki@yamashina.or.jp

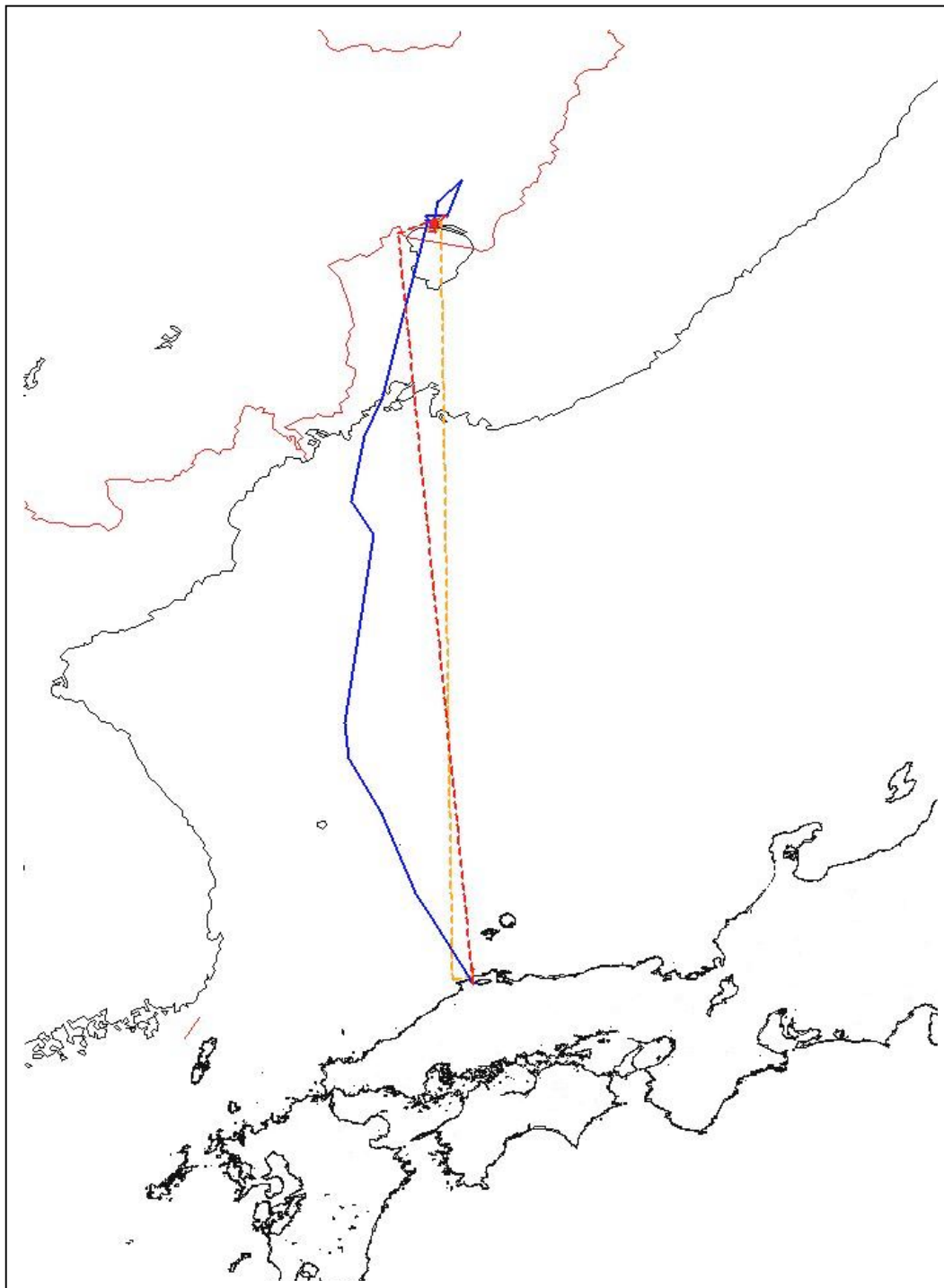


図-1 衛星追跡結果

実線：A 個体、途中で受信され、渡りの経路が示されている
点線：B・C 個体、渡り前と後の位置が直線で結ばれている

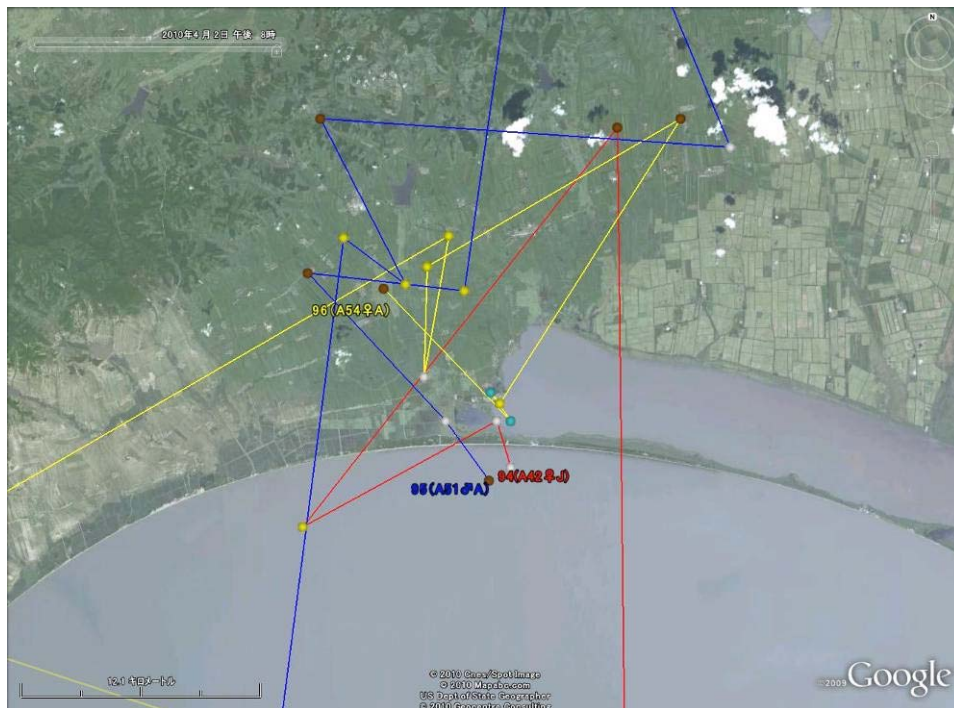


図-2 中国黒竜江省ハンカ湖の北岸の拡大
図

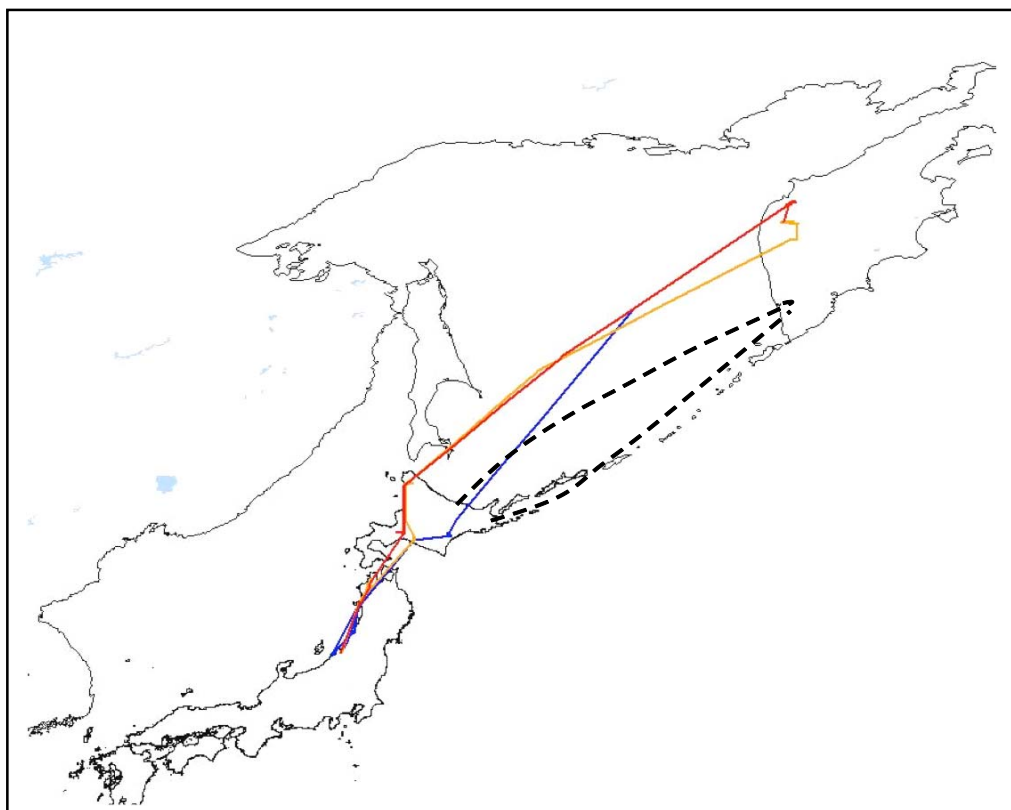


図-3 従来知られていたヒシクイの渡り経路

実線：亜種オオヒシクイの人工衛星追跡結果（山階鳥類研究所 1999）
点線：亜種ヒシクイの渡り推定図（呉地 2006）



図-4 衛星用発信器を装着されたヒシクイ



図-5 衛星用発信器を装着されたヒシクイ
背中に発信器のアンテナが見える
(財) ホシザキグリーン財団提供

オオヒシクイ研究計画

山階鳥類研究所 (2009 年 10 月)

1. 研究の必要性と背景

ヒシクイの亜種であるオオヒシクイは冬季に日本に渡ってきて越冬する鳥類である。これまで、北日本にやってくるオオヒシクイの渡りのルートは、人工衛星による追跡と、首環をつけた個体の目視追跡によって、北海道を経由してカムチャツカへ渡ることが分かっている。逆に、カムチャツカの繁殖地周辺で捕獲して首環をつけられた個体が、日本の北部へ渡ってくることも確認され、上記のことはさらなる証拠をもって実証されている。

ところで、こうした北日本へ渡ってくるオオヒシクイのほかに、山陰地方（宍道湖や斐伊川）へやってくるオオヒシクイがいて、これらは北日本へ渡ってくるものよりやや小型で形態も異なることが指摘されてきた。

こうした状況の中で、平成 20 年度に、山階鳥類研究所と兵庫医科大学は、日本中の本種の越冬地で脱落した羽を拾い集め、その遺伝子解析を試みた。その結果、山陰地方で越冬するオオヒシクイの遺伝子型は、北日本のオオヒシクイと異なることが明らかになった。

以上の事実から、山陰地方へやってくるオオヒシクイは、1) 別亜種としてもいいのではないかと。2) この個体群の繁殖地は、北日本へ来ている個体群と別の地域であり、渡りの経路も朝鮮半島経由ではないかと、という仮説をたてた。これを実証するために以下の研究計画を立てる。

2. 研究計画

- ①：山陰地方で越冬しているオオヒシクイを捕獲・形態計測後、判別判定をして亜種かどうかを確認する。
- ②：捕獲した際に採血を行い、遺伝子型が異なることを、十分な標本数から確認する。
- ③：あわせて、朝鮮半島、中国内陸部で越冬個体の羽を拾い、遺伝子解析を実施する。
- ④：山陰地方で捕獲した個体に人工衛星対応の発信機を装着し、繁殖地までの帰還ルートを追跡する。

3. この研究の社会的意義

- ①：山陰にやってくる個体群は 100 個体前後と少ないため、レッドリストの絶滅危惧種（亜種）になる可能性が高い。
- ②：山陰の越冬地では、これを保護する方策を立てなければならず、こうした環境を管理している省庁にとっては、この研究は重要な情報となる。
- ③：出雲の宍道湖はラムサールに登録されており、その目玉となり得る。